

夢を見ていた。何度も何度も刺される夢。何度も何度も

痛い

苦しい

辛い

痛い！

いたいいたいいたいいたいいたい！！！！

幾度となくやめてというが、聞き入れられることはない。

刺している人の顔は見えず、表情も分からない。だがケタケタケタケタと笑っている。十中八九その表情には笑みが映っているのだろう。

いや、彼にとって笑っているかどうかなんて関係がない。ただやめてくれれば良いだけだ。だが、決してやめようと思わない。

いたいよ。いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい。

その言葉は無視され続ける。ただひたすらに。ただいたずらに。彼は傷つけられ続けるのだった。

淳は周りの話し声のせいで目が覚めた。ひどくいやな夢を見た気がするが、思い出せない。というよりも、脳がそれを思い出すことを拒否している感じだ。

淳がおきたのに気がついたのか、その話し声の主であった慎が話しかける。

「淳、大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫ですけど……」

淳はその質問に理解ができなかった。どうして大丈夫でないのか。意識がようやく完全に覚醒してきた淳は辺りを見回す。そしてようやく自身の状況がつかめた。どうやらここは病院で、自分はそのベッドで寝かされていたようである。そのベッドの近くには慎と國生の二人がいた。

だけどなんで病院に？

淳はふと疑問に感じる。以前にこのような経験を何度化していたが、それは彼自身戦いによって怪我をしていたからだ。だが淳はそのような覚えはない。だからこそ聞く。

「どうして僕は病院で寝かされているんですか？」

「え、な、お前、何を言っているんだ？」

「え？ だって、僕、病院で寝るような怪我をした覚えがないんですが」

「どういうことだ？」

「なるほど、一時的な記憶障害ですか」

今の会話から事態を把握した国章は、二人の話に割って入った。

「赤羽さん。彼の問診をしたいので、少し外を見回ってきていただけませんか？」

「お前に淳を預けろというのか！」

「その通りです」

「そんなことができるわけがないだろう。第一、お前と一緒にいて淳はこんなに傷ついたんだぞ！」

「ですからそのくだりは何度も説明したではありませんか。雄二君からも聞いているはずですよ。私が来たときにはすでに刺される直前で、助けられたのもぎりぎりでした」

「分かっている！ だが、それでもお前に……」

「貴方の気持ちも分かります。ですがここは病院で、私は医者です。申し訳ありませんが、貴方にも従っていただきます。安心してください。いまここでの私は医者であり、貴方の知っている黒き闇医者ではありません。彼のために最善を尽くす所存です。それに彼はいつか我々と同様に能力を極めるだろう無限の可能性がある。そんな逸材を私がみすみすと見殺しにしたいと思いますか？」

「ちっ。分かったよ。感情論で話しても意味なんかないしな」

「ご理解感謝します」

「だが、どうして俺が出て行く必要があるんだ？」

「彼にお説教はもう少し待っていたただきたいからですよ」

慎が淳の部屋から出るとそれに気がついた雄二が駆け寄ってきた。たつぷりとお説教をし、こつてりと絞った後なのに元気なものだ。慎は半ばあきれながら、しかし彼の淳に対する思いも同時に感じた。

「どうでしたか、先生！」

「まあ、うるさくなりそうだから場所を移そう」

「と、とりあえず大丈夫だったかどうかだけでも」

「分かん」

「分かんって、じゃあ何ででてきたんすか」

「だから一回場所を移そうって」

雄二は慎の言葉に従い、しぶしぶと彼の後ろについていった。そして1階のロビーに着き、慎が自販機でジュース2本買い、雄二に手渡す。慎自身はそれを空け、一口飲むが、雄二は口をつけなかった。「ふう」と一息つきながらイスに座り、話し始める。

「どうやら記憶喪失になったらしい」

「記憶喪失!?!」

「バカ! 声がでかい。いまは夜なんだから、入院している患者さんのことも考えろ!」

「あ、すんません。でも記憶喪失って。どういうことっすか?

全部、忘れてるんすか?」

「いや、どうもそうではないみたいだ。俺のことは認識していたし。詳しくはいま、見てもらってる最中だしな」

「そ、そうなんすか」

「ああ。そうだ。とりあえず、体は大丈夫だったらしいから、あと気になる要因はその記憶喪失だけだな」

慎ははあとため息をついた後、再び缶に口をつけた。

事件が起こった後、國生の車にて淳を病院へと運んだ。その際、雄二も同行しており、彼は助手席に座っていた。車で今日あったことを國生に聞きだされ、大まかな流れを話した。いくつか國生は質問をしたが、それ以外は黙って雄二の言葉を聞いていた。

國生の運転は比較的安全運転であったが、道がすいていたこともあり、病院へは30分程度であった。病院の大きさに、大学病院等大きな病院にいったことも見たこともなかった雄二は驚いた。

「また急患かよ」

受付で対応した医者が國生に向かってぼやいた。

「ええ、申し訳ありません。ですが、高圧電流を浴びてしま

ったようなので、一応精密検査をしておこうかと思つて」

「高圧電流ってなんだよ」

國生はこの問いに答えず、くすくすと笑っているだけだった。医者はこの國生の様子を見て、ため息をついてから「ああ、もういいや」とこぼした。

淳が精密検査を受け終わり、体は大丈夫だという結果が出たが、意識が戻らなかったので、入院ということになった。そして彼が入院患者用のベッドに運び込まれて少しした後、慎が来た。精密検査を受けている途中、國生が電話で連絡を取っていたためだ。電話で一通り説明を受けていたので、慎はついでに淳の安否を國生に聞いた後、雄二に説教した。

なぜそんな無茶をしたのか。

どうして自分が来るまで待っていなかったのか。

はるか格上の、それも命をなんとも思っていないようなやつがいる中でそんな行動をとったのか。

勿論、雄二にも言い分があり、言い返した。だが、「もしも國生が来なかったら、淳は死んでいたんだぞ！」という言葉には一切言い返せなかった。そしてその言葉を聞いて気づ

いた。自分たちの、否、自分の勝手な考えのせいで、淳を殺しかけてしまったのだと。一通り説教し終わった後、慎は淳の寝ている部屋に入って彼の容態を見に行った。そこには國生がおり、そして彼に改めて今回の事件のことを聞いた。

「そもそもなんでお前が現場に居合わせていたんだ？」

「仕事ですよ、いつもどおり」

「仕事、ねえ。誰から頼まれたんだ？」

「申し訳ありませんが、それはお答えできません。私にも守秘義務というものがありますから」

「じゃあ何のためにいたんだ？」

「完全には答えられませんが、それでもよろしいですか？」

「ああ」

「最近、あの殺戮の橙に集うものたちの動きが活発になって、いることを知っていますか？」

「えーと、確かうちの学校に来たやつらも殺戮の橙の配下だったな」

「ああ、そういえばそうでしたね。ともかく、そのための情報収集として私は行ったんですよ。そのとき偶然、彼らを、

いえ、淳君を見ましてね。なにやら危なそうだったので、助太刀したんです」

「ふん、なるほどな。だがやつらの目当ては、俺、だったんだろ……」

「ええ、そのようです。中国の方もそう述べていました」

「ちっ、俺が原因かよ」

「事故ですよ、これは」

「確かにそうかもしれないけど、でもやはり、な」

「まあ、お気持ちは分からなくはないですが。それよりこれからどうなさるのです？」

「とりあえず当面は情報収集だな。やつらが何を考えてるのかわからなすぎる」

「案外、何も考えていないのかもしれないよ」

「悪いが今は冗談に付き合える余裕はない」

「普段は冗談ばかり言っているの？」

「うっせえ」

慎がその言葉を少し強く発言したためか、それともいままでの会話がうるさかったのか、淳が目を覚ました。

「お、淳、大丈夫か？」

「どうやら精神的なショックによる一時的な記憶障害ですね。今日のことを思い出すことを脳が拒否しているみたいですよ」

「どういうことだ？」

問診を終え、慎と雄二がいるロビーに來た國生は結果を伝える。

「今日、ショツキングな出来事があったのは皆さんもご存知でしょう。それを脳が思い出さないように、シャツアウトしているのです」

「つまり、刺されたことがショックで、それを思い出さないように忘れたってことか？」

「ええ、その通りです」

國生はうなづく。

「勿論ふとしたきっかけで思い出す可能性はあります。一生忘れたままの可能性もまたあります。ですが精神科医が言う

には思い出さないほうが良いかもしれないとのことでした」

「かなりのストレスになるから、か？」

「ええ、その通りです」

「確かに、そうだな。脳が思い出すことを拒否するほどのつらい記憶なら、思い出さないほうがいいのかもしれない」

「まあ、ともかく一日は安静にしてもらって様子を見ます。体は大丈夫みたいなので、もし精神的にも大丈夫ならすぐに退院となるでしょう」

「そうか。それはよかった。しかし親御さんへの連絡はどうしようか」

「それなら安心して良いですよ。通り魔事件にあったということになっていきますから」

「と、通り魔事件？」

「ええ。ここに来る途中、雄二君の話を聞き、そして二人で口あわせするための話を作っておきました。貴方はそれを雄二くんから聞いたという設定で親御さんにお伝えください」

「なんだかなあ」

慎はつぶやき、そして淳と雄二の二人の家に電話をかける

の  
だ  
っ  
た。  
。